●「赤心」継がん
Dream 五代塾 Sinbun（新聞）
Godaijuku
第 11 号
発行：Dream 五代塾
吹田市千里山西 5-14-17
発行責任者：理事長　川口 建

我が家でお宝発見
五代友厚の「竹の絵」のお軸

Dream 五代塾会員（五代豊子曾孫）
堂本敏雄　（東京在）

西宮の実家、天袋の奥から!!

「悪いけど、季節も変わったから床の間の掛け軸を変えて」と母の洋子（92 歳）が言いました。昨年暮れ、父秀雄（元神戸銀行→三井住友銀行勤務）が逝去し、東京に住んでいた私が西宮の両親の実家の荷物を整理している時のことでした。押入れの天袋の奥から濃い茶色に変色した古ぼけた細長い桐の箱が出てきました。箱書きには「不明」と墨書され、中を見たら「竹の絵」の掛け軸が入っていました。

堂本洋子さん
（西宮の自宅にて）

私が学生時代（50年近く前）に母方の祖母萱野みね子から、五代さんの掛け軸があると聞いており母に確めたところ、「その掛け軸ではないか?五代さんは竹の絵が得意だったらしいから」、と語りました。そこで知人の紹介で京都の老舗古美術オークション会社の古裂會さんに鑑定を依頼した結果「ほぼ、五代さんの描いた掛け軸に間違いないであろう」とのことでした。

母がそのことを親戚でもある当会の曾野豪夫顧問に伝えた処、川口建理事長のご訪問を頂きました。川口さんのご推薦で鹿児島「黎明館」に真贋の鑑定をお願いしたところ、画風、署名の書体、落款も一致したとお墨付きを頂きました。母が署名を天眼鏡で見たところ、松陰の松の字のところが「杰」と書かれており、曾野さんの母方実家永見家の「竹の絵」の掛け軸の署名が「松」となっているので心配しましたが、曾野さんは写真を一見して竹の絵の画風から五代さんの筆使いで間違いない、と判断されていました。黎明館によると五代さんは両方の署名を使用していたとのことで安心しました。汚れた桐の箱は、新しい布巾で心を籠めて埃を拭いて綺麗にしました。

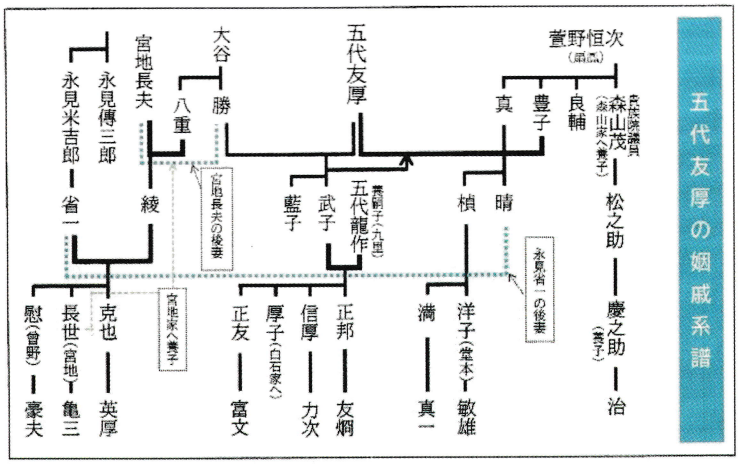
10月2日に開催された「五代友厚公の墓参会」にお軸の入った桐の箱を持参して母と共に五代公の墓前に掲げ、後刻開催された勉強会の席で参加された皆様にご披露しました。その際、掛け軸に「丁丑夏日」（明治十年）と書かれており、145年前の作品だと教えて頂きました。不思議な縁で、偶々私の息子毅（ツヨシ、三井住友銀行勤務）も前日から妻と孫二人を連れて勤務先の上海から遅れた夏季休暇で帰国しており、五代さんならぬ、四代で墓参会に参加できました。森山家から治氏とその娘さん、永見家からは従兄弟姉妹六名が参加され邂逅の機会を得たことは嬉しいことでした。

墓参後のセミナー・懇親会風景

五代豊子は大和の儒家萱野恒次（扇鳳先生）の三女で、その長兄に茂（森山家へ養子、もと外務省高官、富山県知事、勅選貴族院議員25年間）がおり、三男真（シン）の子に晴（ハル、元十八銀行監査役永見省一の後妻、曾野さんは省一の外孫）、弟の楨（ミキ）が私の祖父です（戦時中日本鋼管（JFE）の中国山東省の鉱山責任者として勤務中に終戦）。

楨の長男の満（元丸紅勤務）、その姉洋子（私の母）と繋がります。満叔父と曾野さん（元兼松勤務）と妹さん（香月喜久子）は長年親戚付き合いをしていました。このような関係から私の曾祖母豊子の夫五代友厚の「竹の絵」のお軸が我が家にあった次第です。私共はこの掛け軸を黎明館に寄贈して末永く保存して頂くことにしました。私も65歳となり長年勤めていたセブン-イレブン・ジャパンを今年引退し少し時間が取れるようになりました。堂本家のルーツはある程度把握しておりますが、今後母方のルーツを辿る旅に出たいと思っております。五代さん夫妻に関わる事柄を母から聞いたり、資料の検分、五代さんゆかりの地を訪れる中で何かしら新しい発見がありましたら、皆様にご紹介したいと思います。

Dream 五代塾の皆様と私は同床異夢の部分もありますが（皆様は五代さんの業績を称え、名誉回復を目指す。私は前述の母のルーツを辿る旅）、皆様のお仲間に入れて頂いてこれからも意見交換をさせて頂きたいと思います。



五代友厚とトーマス・グラバーとマダム・バタフライと

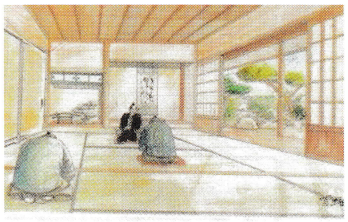
Dream 五代塾顧問　曾野豪夫

トーマス・グラバー

薩摩藩士五代友厚が藩命により長崎海軍伝習所に入所するため鹿児島から長崎の地に足を踏み入れたのは 安政四年（一八五七）、二十三歳のときであった。それから慶応三年（一八六七）末に大坂に転ずるまで十年間を長崎で勉学にそして藩務に励んだ。（その間、上海やヨーロッパ出張、薩英戦争後武州での潜伏期間や鹿児島勤務もあったが。）

トーマス・グラバーは、スコットランドで一八三八年（天保九年）に生れた。父は海軍出身で造船を業としていたのでトーマスも幼児から海外に関心を持っていた。安政六年（一八五九）二十歳の時上海に渡航してジャーディン・マセソン商会に就職し、二人の弟を連れて長崎出島の蘭館の一軒の家に落ちつき将来を画した。翌万延元年（一八六〇）、グラバーはもと銅座町の豪商永見徳太郎の大浦の借家に事務所を設けて貿易商を始めた。徳太郎は前年亡くなっていたので弟の傳三郎が永見商店主として兄の貸家を世話したものと思われる。グラバーの二人の弟は慶応年間に帰国した。永見商店は長崎本商人で豪商の一つに挙げられ、薩摩藩御用達だった。勿論ジャーディン・マセソン商会とも取引があった。

傳三郎は五代より五歳年長でやがて両名は肝胆相照らす仲となり、また後年刎頸の友となったといわれている。永見家では、傳三郎が五代にグラバーを紹介した、と云い伝えられている。そして傳三郎の弟米吉郎（私の外曾祖父）が五代の手足となって長崎で、そして慶応二年五代に促されて大坂に居を移し、三年末に上坂した五代の筆頭執事として大阪での諸事業を終生補佐した。明治十八年、四十九歳で亡くなった五代の棺を担いだ四人の内の先端を担ったのが米吉郎と元通辞堀孝之である。翌年、米吉郎は豊子未亡人宅を人力車で訪問の途中、脳卒中で急逝した。享年四十八。米吉郎宅は今の日銀大阪支店の南側を流れる土佐堀川を挟んで南側大川町（現北浜四丁目）にある住友ビルの東北角にあったので、淀屋橋の上で亡くなったのではないかと想像している。



五代友厚に挨拶する永見兄弟（想像図）
曾野田大描く

グラバーの妻ツルは五代の紹介によるものであった、との説があるが確証はない。五代は慶応三年末以降大阪で活躍している。グラバーの長男倉場富三郎が生れたのは明治三年で永見各家とも昵懇で、大阪で生まれ育った私の外伯父永見克也も戦前長崎十八銀行に勤務していた頃に何回か会っていた。富三郎は敗戦直後に亡くなった。ツルはオペラ「マダム・バタフライ」のモデルであるといわれているがこれも怪しい。戦後言われだしたとのことである。

オペラ「マダム・バタフライ」

昭和三十八年（一九六三）二月、私は兼松がユーゴスラビア（現セルビア）南部で建設を請負った綿紡績一貫工場の建設事務所長として赴任した。当時日本人の海外渡航者数は七万三千人、一日当たり二〇〇人だった。日本人技師数名と一緒に夕食後レストランでワインを飲みながらジプシー音楽を聞いていると、一人の老セルビア人が慇懃な態度で話しかけてきた。私「どうぞ、どうぞ。ワインかトルココーヒーは如何？」「有難う、トルココーヒを頂きます」。私も技師もセルビア語が分からない。彼の言うことがようやく分かったことには、ここから九〇キロ南のスコピエという街に明日の夜日本のプリマドンナが演じるオペラ公演がある。自分はこの村に一台しかないタクシーの運転手である。明晩それを見に行こう、と言うことだった。私は、我々三人と運転手の観劇券四枚分の代金と、観劇券購入と観劇のための往復二回分のタクシー代金にたっぷりとチップをはずんで髭の運転手に渡した。

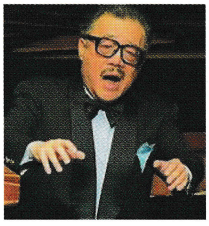
翌夕、彼のタクシーが迎えにきた。アメリカ占領軍が残していった古い車。暖房が効かない。後部のドアノブが故障しているので乗客がドアノブをしっかりと手前に引っ張っていなければならない。幾つかの村落を通る時以外は真っ暗な夜道である。まだ後進国（貧乏国）なので街灯はない。寒い寒い！一時間余りのちマケドニアの首都スコピエに着いた。街はうす暗い。しかし、おや！と思うほど小ぶりながら戦前の立派なオペラハウスの前で下車した。冷えている身体でオペラハウスに入ったが、暖房はほんの申し訳程度の暖かさで、満員の客席は皆オーバーコートを着たままである。プログラムを見て驚いた。砂原美智子の「マダム・バタフライ」ではないか。

プッチーニのこの歌曲は有名であり。私も大好きである。しかしステージの日本人は砂原美智子一人である。蝶々夫人の着物姿はとも角、西洋人が演じる日本人役の衣装、立ち居振る舞いは全く恥ずかしくなるほど不可解な演出だった。プッチーニは日本に行ったことがなく、オリエントへの憧憬をオペラにしたものだった。しかし、公演は大成功。ユーゴ人の拍手は鳴りやまなかった。終幕で蝶々さんが自決することが、敗戦時の「Tokotai」に結び付けられて今も世界中の人々に受け入れられているのではなかろうか。（この手記もこの歌曲を聞きながら書いている。）

興奮冷めやらぬうちに観客はぞろぞろとホールを退出した。運転手は私を別の方向に誘（いざな）った。と、ある扉の前に立たされた。運転手は「Mr.」と言って後ろ手に持っていた花束を私に渡すや否や扉をノックして開き、私の背中をトンと押した。私は部屋の中に押し込まれた。と、目の前の砂原美智子に「まあ！こんなところに日本人が！」と強く抱きしめられた！独身の私は驚いて碌な挨拶もできなかった。帰りのタクシーの髭の運転手はセルビア語でなにか嬉しそうに話しかけてきたが私には意味がさっぱり分からない。寒い寒いタクシーは凍り始めた道路をスリップしながら対向車もない星空の下を一時間余りかけて宿舎に戻った。髭はその後東京から届いた日産セドリック 190 の運転手に収まった。（砂原美智子、大正十二年-昭和六十二年）

国際的なオペラ歌手

岡村喬生（昭和六年-令和三年）は、私がユーゴに駐在していた一九六〇年代からヨーロッパでオペラ歌手としてのキャリアをスタートさせ、「蝶々夫人」でボンゾ役を演じることが多かった。しかし、おかしな日本人像に疑問を抱き抗議するが、誰にも受け付けてもらえなかった。日本へ戻ってからも「蝶々夫人」の台本改訂への思いを忘れなかった岡



本は平成二十一年、台本改訂をテーマにしたシンポジウムをプッチーニ財団と共催するまでにこぎつける。それを機に改訂台本による公演も契約されたが、二十三年、脚本の変更はプッチーニの家族によって拒絶された。その姿を追ったテレビ番組『プッチーニに挑む～岡村喬生のオペラ人生』が翌年放映された。平成二十九年暮れ、私は西宮から東京に移住した。ある年、ある国の駐日大使館でのパーティで岡本先生がおられたのでお話しをしようと思ったが、早くに退出されたので砂原美智子の旧懐談ができなかった。翌々年、つまり昨年新聞で岡村先生の訃報を知った。五代さん、オペラを鑑賞されましたか？

五代の生涯の偉業「弘成館」鉱山業（二）

Dream 五代塾顧問　八木孝昌

天和銅山の取得

奈良県吉野郡天川村の天和山（てんなさん）は江戸時代から銅山として採掘が行われていましたが、明治四年（一八七一）十月に五代友厚がそれを入手します。購入金額は一万両でした。当時の一両を仮に今の一万円とすれば、一億円の買い物です。

それより前、明治二年（一八六九）八月に、五代は大阪府西成郡今宮村（現浪速区恵美須町）に金銀分析所を設立していました。官退職のあと、五代が最初に設立した会社です。それは、その半年前に大阪の川崎村（現北区天満）に政府機関として造幣局が設置されたことと歩調を合わせています。慶応四年（一八六八）に香港造幣局から英国製の貨幣鋳造機を政府が購入する際に、五代は外国事務局判事としてその購入に関わっていました。ですから、五代は造幣局がやがて金貨・銀貨の鋳造を開始するという情報をもっていたことになります。

天和鉱山跡の説明版

造幣局の貨幣鋳造は明治四年から着手され、同年六月十六日より金・銀の地金（じがね）の買い取りが始まりました。金銀分析所は江戸時代の小判や銀貨を溶かして純化した地金を造幣局に納品し、多額の利益を得ました。天和銅山を購入した資金は金銀分析所の収益から出たものです。以降も五代はその収益で次々と鉱山を買い求め、明治六年（一八七三）一月に鉱山会社「弘成館」を設立します。

「弘成館規則自序」

「弘成館」という社名は、島津斉彬薩摩藩第十一代藩主が設けた工場施設群「集成館」から採られたと推定できます。斉彬公は日本が欧米に伍する近代国家になるためには富国と強兵が不可欠であると考えた開明藩主でした。そのためには自力で大砲や軍艦を製造する必要があると考え、藩内に鉄の熔解・精錬のための反射炉を初めとする近代工場施設群「集成館」を設けました。五代の起草した「弘成館規則自序」には、集成館に込められた富国思想を継承しようとする心意気が見られます。

「自序」前段には、弘成館設立の目的が次のように書かれています。

今茲（ここ）ニ弘成館ヲ興立シ、以テ永世普久ノ鴻益（こうえき）ヲ起スベキ為ニ、土質ノ講学ヲ実地ニ開キ、山岡土中ノ鉱物ヲ発掘シ、国家ノ公益ヲ顕ント欲ス。

ここには、国家社会の末長い発展のために、鉱物資源の採掘によって、国家の公益に寄与したいとする「弘成館」の壮大なビジョンが述べられています。近代文明を支えるのが金属であるという五代の考えは、青春時代を送った斉彬公の藩政下で芽生えたものでしょうが、慶応元年（一八六五）の薩摩藩英国留学生派遣に五代が参加してヨーロッパ文明に触れたときには確信となっていました。

「自序」の後段では、弘成館の利益配分について「館中ノ規則ヲ以テ、各其分ヲ恵割シ、終身治養ノ目的ヲ与ヘ、或ハ友子ノ志ヲ助クベシ」と記しています。

「各其分を恵割し」とは、「弘成館財本規則」に具体的内容が書かれているのですが、会社が挙げる利益の十分の一を社員の月俸の金額に比例させて支給するというものです。また、「終身治養ノ目的ヲ与ヘ」については、社員配当によって終身の生活安定の見通しを社員がもてるようにするためであると説明されています。

「友子ノ志ヲ助クベシ」とは、功績のある社員や誠心を以て勉励する社員に与える別段の賞のことで、利益の十分の一が予定されています。

結果として弘成館の事業は目論まれた利益を挙げませんでした。そのため、社員への利益配分は空手形に終わった観があります。しかし、国家公益のための資源採掘という壮大な事業に社員参加型の近代的な企業形態を付与した五代の先見性は高く評価されなければなりません。

半田銀山の取得

五代が購入した鉱山の中では、天和銅山が豊富な採鉱量によって事業上の柱となっていました。五代は鉱山業の規模を拡大するために、明治七年（一八七四）に少なくとも七つの鉱山を取得します。その七鉱山のうち同年三月に取得した備前国（現岡山県）和気郡の和気山が銅・銀の鉱山として天和山に次ぐ成績を挙げました。しかし、投資倒れに終わったと見られる鉱山もいくつかありました。

そういう玉石混交の中で、五代が大きな期待を寄せた鉱山がありました。それは同年七月に取得された岩代国（現福島県）伊達郡北半田村の半田銀山でした。半田銀山は江戸時代には徳川幕府の「直山（じきやま）」、すなわち直轄経営の銀山として日本の三大銀山とされていたものです。

半田銀山は明治に入って、地元の中村藩の預り領となっていましたが、明治三年に起きた坑内火災によって休坑となりました。五代はそれを政府からの払い下げによって取得しました。そして新しい収銀法として、ドイツ式のフライベルヒ法による樽混汞（こんこう）法を導入しました（以上、佐藤次郎『半田銀山の歴史』桑折町文化記念館刊より）。

けれども、採鉱が順調に進んだわけではありませんでした。地元農民から、銀山で鉱石を洗浄するときに排出される「濁水」が田地の「稲苗」に害をなすのではないかという疑念が表明され、それに対応する必要が生じました。汚染のおそれがある排水を企業がどう処理するかという、後の公害問題の先駆けとなるような事態が起きたのです。

五代は採掘の必要性を優先させるのではなく、「濁水」問題への対処に取り組みました。

（次号へ続く）

「赤き心」-五代友厚の歌-作曲に寄せる思い

Dream 五代塾会員　堀内圭三
（シンガーソングライター）

「生かされている命への感謝」を基本テーマに、長年音楽活動を続けていますが、重ねて心から尊敬し心酔した偉人に捧げる曲もこれまでに、坂本龍馬、西郷隆盛、中江藤樹と、作ってきました。

予てから尊敬していた五代友厚に捧げる曲も、いつか作りたいと心の中に思いを持ち続けていましたが、2020 年 12 月に公開された映画『天外者』を見て以来、更にその思いが強くなりました。そして昨年一月『新・五代友厚伝』(八木孝昌著)を拝読し、終章に五代友厚を評した「壮大なビジョンと利他の精神をもって、近代日本の道筋を開いた富国の使徒」という記述、そして盟友寺島宗則が臨終の床にあった友厚を見舞った時の記述を読ませて頂いた時、溢れる熱い涙と共に、五代友厚に捧げる曲は、著者である八木先生に是非書いて頂きたいとの思いが強く溢れてきました。

そして何と、八木先生は Dream 五代塾の顧問をされていることを川口理事長から教えて頂き、その後八木先生にもお会いして作詞の執筆をお願いし、「赤き心」の素晴らしい詞を書いて下さいました。

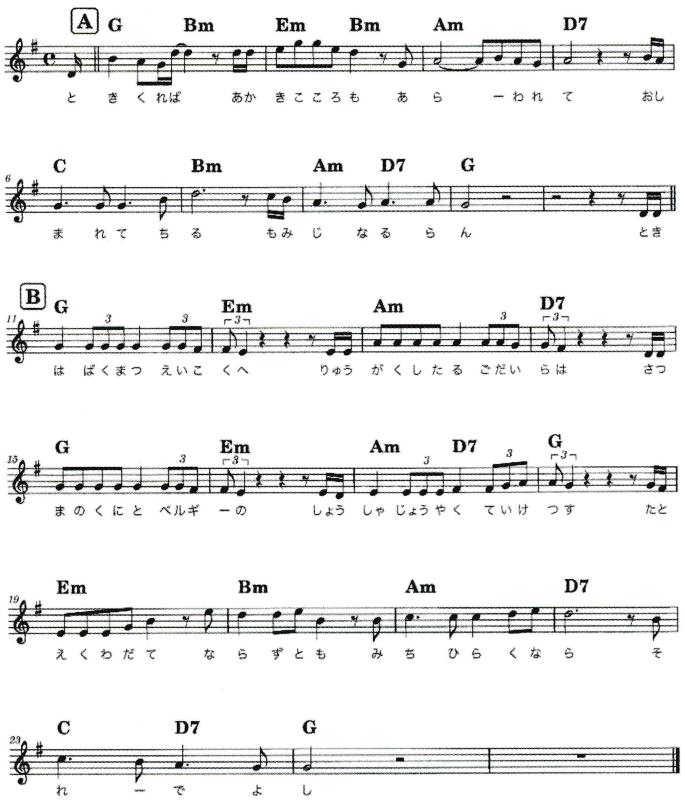
また「赤き心」の中には、友厚を尊敬していた薩摩藩の後輩 前田正名の感動的な追悼歌が二度出てきますが、以前明治時代に京都府綾部市で製糸会社「郡是」(現グンゼ)を創業した波多野鶴吉翁に心酔し、「一糸紊れず」という曲を作らせて頂いたんですが、社名の「郡是」は、当時の何鹿郡(いかるがぐん/現綾部市)で、前田正名の講演を聞いた鶴吉翁が、講演の中での「国には国のあるべき姿・国是、郡には郡のあるべき姿・郡是が必要だ。」という言葉に感動して、社名にしたという経緯があったので、今回前田正名の追悼歌を核として、五代友厚に捧げる曲を作らせて頂けたことも、何か目に見えないご縁を感じました。

これから五代友厚の成した功績をもっと広く知って頂きたいですが、八木先生が書いて下さった「赤き心」の詞の中に、大切なことが全て要約されていますので、この「赤き心」を通じても、五代友厚という偉人の生涯を知って頂くきっかけになれば幸せです。あらためて素晴らしい詞を書いて下さいました八木孝昌先生に、心から感謝申し上げます。

YouTube QR コード

赤き心
-五代友厚の歌-

作詞：八木孝昌
作曲：堀内圭三



「赤き心」歌詞

歌詞：八木孝昌

時くれば 赤き心も あらわれて
惜しまれて散る 紅葉なるらん

時は幕末英国へ 留学したる五代らは
薩摩の国とベルギーの 商社条約締結す
たとえ企て成らずとも 道拓くなら それでよし

攘夷の事件勃発し 外国掛(がかり)参与とて
堺港におもむきて 国難救う大奮闘
たとえ犠牲を払うとも 国守るなら それでよし

天和(てんな)鉱山皮切りに 求めし山は二十一
近代産業支えんと 鉱山王の道を往く
たとえ私財を失くすとも 国富ますなら それでよし

官有物の払い下げ 政商五代引き受けと
誤報を流す新聞に 五代はしかし黙したり
たとえ汚名をかぶるとも 国割れぬなら それでよし

街に活気を戻さんと 大阪商法会議所の
会頭務め丸五年 激務の果てに力尽く
たとえこの身は亡ぶとも 民栄ゆなら それでよし

時くれば 赤き心も あらわれて
惜しまれて散る 紅葉なるらん

前田正名の捧げたる 追悼の歌そのままに
赤き心を貫きし 五代友厚 大阪の
恩人の名はいつまでも 我らの胸に 残るべし

時くれば 赤き心も あらはれて　惜しまれて散る紅葉(もみぢ)なるらん

「もみじは時機が来ると赤い心が表へ現われるかのように紅葉し、惜しまれて散ってゆくが、国益・公益のために尽した五代の忠誠心というべき赤き心もいよいよ明らかになるだけに、その逝去が惜しまれてならない」
というほどの歌意である。これを詠んだ前田正名は五代より十五歳年下で、前田にとって五代は崇敬(すうけい)おくあたわざる先輩であった。
『Dream 五代塾 Sinbun』第 2 号掲載(八木孝昌訳)

報告・連絡

●2022 年 10 月 29 日(土)五代友厚ゆかりの地探索①
実施(木津川・川口周辺)
堺事件を語り継ぐ会会員 18 名と当塾会員 2 名参加。土佐稲荷神社をスタート、松島遊廓・大阪港・川口税関・外国人居留地・川口基督教会・大阪府・大阪市庁舎跡・大阪商業講習所等々、当時の状況をイメージしながら約 3 時間の行程を探索。

■堺事件を語り継ぐ会は 12 月 26 日(月) 19 時より「堺事件～時代に翻弄された若者たち～」のドキュメンタリー映像の上映会(無料)を企画。詳細は左記 HP に掲載中。お時間の合う方は足をお運びください。

編集後記

月日の過ぎるのは早いものでもう師走となりました。今年は世界が大きな不安の中に過ぎて行き、現在の日本を取り巻く世界の環境は大きく変わっている。 薩摩の郷中教育の中に金銭欲、利欲が最も卑しむことだと教えているが。今の世界に一番必要な考えではと思う。今の世界に一番必要な考えではないだろうか。
何とかより良い場所に引っ張って行ってくれる真のリーダー達が沢山出現してくれることを期待しつつ、来年も皆様何卒よろしくご教授、ご支援よろしくお願いいたします。
よいお年をお迎えください。(川口由美子記)

HP QR コード

連絡先：川口建
Mobile：080-4497-5688
Email：gogoken12345@gmail.com